久米常民著

万葉集

桜楓社

検印
省略

万葉集・時代と作品

昭和四十八年二月十日初版印刷
昭和四十八年二月十五日初版発行

定価 一五〇〇円

著者 久米常民
発行者 及川篤二
印刷所 暁印刷株式会社

101 東京都千代田区猿楽町二―二―六
㈱桜楓社
(電話)(〇三)二九一―五六六一
(振替) 東京 一八〇二〇

3092―730104―0723

まえがき

謎の宝庫 万葉集

万葉集とは何か。こんな問をまっ先に掲げると、読者はきっとふき出すだろう。何故なら、万葉集という書物は、私共の目の前に現にどっかりと存在しているからである。

その実物を手にとってみれば、そこには四千五百首の和歌が二十巻に集められている歌集であるということが一目瞭然である。

しかし、このテキストを目に見えるところだけ説明すれば、それで、万葉集が何であるかという問に答えたことになると言うのであろうか。

先ず万葉集は、いつ編さんされたのか。そういう問に対して、私共は、参ってしまう。年代の明らかな万葉集の歌で一番新しいのが、淳仁天皇という天皇の天平宝字三年（七五九）正月の、大伴家持の歌（4516）であるから、私共が手にすることの出来る万葉集が成立したのは、その時点からかなりあとであろうということは分るが、それがいつであったかということが先ず明らかではないのである。

成立した年代が分らなければ、自然編集者も分らないということになってしまう。編集者については、橘諸兄という人物が考えられ、また大伴家持だともいう。現在の万葉集の巻十七以下四巻が家持の歌日記の形になっているし、その家持の上長と仰いだ人物が、諸兄であったという因縁も考えられるからである。

しかし、現在の万葉集の二十巻は、多少の類似を持ってはいるが、それぞれの巻がちがった内容と形式で出来て

いる点から、決して統一ある編さんであると考えることは、出来ない。そうすれば、その編さんに参加した人物も、原撰者・追補者・増補者という数種の人物が考えられ、さらにその資料の筆録者などという各種・各段階での関係者があったとしなければなるまい。その点でも、万葉の編さん者は不明ということになってしまう。

現在の万葉集の実態を検証してみると、大伴氏少なくとも大伴家持という人物を除外しては考えられないということになるのが、その落ちつきさきである。一体「万葉集」という名はどうしてつけられたか——これも問題である。万葉集は二十巻だという。それは目で見て分ることだが、何故それがそれぞれ別個の形をなしているのか。平仮名・片仮名が成立する以前に出来た歌集であるから、漢字という中国伝来の文字の音訓を巧みに利用して歌が表記されている。その場合、いわゆる一字一音式という表記の仕方、例えば

4401 可良己呂茂　須曽爾等里都伎　奈苦古良乎　意伎弖曽伎怒也　意母奈之爾志弖

と表記された場合、これを

4401 唐衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして

——晴衣の裾にとりついて泣く子供をあとに残して出て来たことだ。その子供には母親がないのに。——

と訓んで、九州地方防備に徴発された防人の悲別の歌とうけとることは、それほど困難ではないであろうが、

2447 白玉　従二手纏一　不レ忘　念　何畢

という漢字十字を三十一音に訓まねばならぬとしたら、これは大変な仕事だと気づくであろう。そして、そこに誤記や誤写があるとしたら、手も足も出なくなってしまうことは、見やすい道理であろう。しかし、幸なことに先にあげたような一字一音式の万葉の作品が、かなり存在するから、それらからの類推によってこの歌も、

2447 白玉を手にまきしより忘れじと思ひしことはいつか畢らむ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

――白玉のような美しいあの子をいだいた時から、忘れまいと思ったことはいつ終ろうか、いやいつまでも終ることはない。――

という風に訓めている。しかし、それで果してこの歌を表記した人の訓み方と一致しているのかと言われると、甚だ心もとないものだ。なかには全然見当のつかない歌もある。

9莫囂円隣之大相七兄爪謁気　吾瀬子之　射立為兼　五可新何本

は、その代表である。初二句はまだどうにも訓めていないのである。また訓めても意味の分らない歌もある。訓み方が人によって違うといった場合もある。こういう事が、他の歌集にあるだろうか。

作者が不明だということは、後の歌集にだってある。しかし一首の歌に二人の作者名があげられているということは、他の歌集にはそうざらにあることではない。万葉集では、一首の歌を誰の作品にするかということが、大論争になっている。例えば、額田王と斉明女帝、大伴旅人と山上憶良などの場合がそれである。

そして、また万葉集の作品が、どういうところで、どんな風に誕生したか。そして、その歌風がどんな風に変化し発展したかというような問題にも、つきせぬ問題点がある。万葉集の作者は、天皇から官吏・農民・兵士・乞食者にいたるまで、中央地方にわたるあらゆる階層に及んでいる。動物が居り、植物があり、風土・地名がみえる。それら万葉の人とそれをとりまく一切のものとの関係にも、つきせぬ問題がある。万葉集は謎である。

原始の森　万葉集

万葉は謎の宝庫だといった。これは言いかえれば、千古の謎を秘めた原始林だと言ってもよいかもしれない。原始林は人のふみこんだことのない森のことだ。人がここに一歩足をふみ入れたら、二度と出て来れなくなってしまう神秘な森だからである。万葉集の研究の歴史は、現在で既に一千年を越えているのだが、この原始林の中にさまよい続けて死んで行った学者は、一人や二人ではないし、現に我々も、この

林の中をさまよい続けている。

万葉集は、謎にみちているといった。しかし、それは分らない事にみちているという意味だけではない。分れば分るほど、私共の魂を深くゆさぶる何者かに満ちているという意味でもある。この原始林への彷徨は、飢と疲労による死への道程ではなくして、美酒佳肴をもってする饗宴への楽しき招待である。

さて私共も、この饗宴への招待に応じて原始林のさすらいを始めようではないか。

万葉集・時代と作品

目次

まえがき

一　**万葉集の時代とその区分**……七
万葉集の時代と区分　7　万葉のあけぼの　10　朝鮮への出兵　12　近江への遷都　14　壬申の乱と大津宮崩壊　15　飛鳥浄御原の宮　17　持統女帝と藤原の宮　19　平城京への遷都　21　元正女帝の治世　23　聖武天皇の治世始まる　24　長屋王事件と立皇后　25　流行病と橘諸兄の出現　27　藤原広嗣の乱と久邇京　28　紫微中台と藤原仲麿　30　万葉集の終焉　34

二　**万葉第一期の歌人たち**……三六
記紀歌謡人磐姫皇后　36　古代英雄　雄略天皇　39　書紀・万葉の舒明天皇夫妻　42　悲劇の人　有間皇子　48

三　**大津宮文学サロンの歌人たち**……五〇
文学サロン　大津の宮　50　サロン宮廷の主宰者　53　文学サロンの女歌人たち　58　文学サロンの花　額田王　61　近江朝の女性挽歌　66

四　**壬申の乱と万葉集第二期**……七一
壬申の乱その発端　71　大海人皇子その挙兵　74　瀬田川畔の決戦　77　壬申の乱の観方　79　飛鳥浄御原宮その政治　81　持統女帝と藤原の宮　83　藤原宮の造営経過　83　藤原宮の景観　86　藤原宮その宮址　90　藤原宮造営とその意義　92

五　**柿本人麿の文学**……九九
人麿の万葉作品　99　人麿の従駕作品　100　人麿の挽歌　103　高市皇子をいたむ　106　人麿の献呈挽歌　112　妻への挽歌　114　人麿の相聞歌　119　万葉集の

羈旅歌　123　人麿の羈旅の歌　124　人麿の辞世の歌　126

六　第二期歌人群像……一三八
はじめに　128　天武天皇とその作品　129　大津皇子と大伯皇女　130　持統女帝とその御製　134　但馬皇女と穂積皇子　137　高市黒人と長忌寸奥麿　140　むすび　143

七　第三期万葉の世界……一四四
二つの世界　144　都を中心とする伝統の世界　144　九州大宰府と筑紫歌壇　149　巻五論と筑紫歌壇　151　旅人・憶良と筑紫新文学　158　余裕——風流の文学　158　散文への傾斜　160　叙事的傾向　165

八　旅人と憶良……一七一
大伴旅人の生涯と文学　171　山上憶良その生涯　178　憶良文学その主題　183

九　赤人と金村と虫麿……一九六
赤人と金村　196　宮廷歌人山部赤人　196　笠金村とその文学　201　高橋虫麿と伝説歌　208

一〇　女流歌人　坂上郎女……二一四
坂上郎女その生涯　214　坂上郎女の作品・作風　218

一一　万葉第三期歌人群像……二二六
聖武天皇と皇后光明子　226　大伴三中の作品　230　沙弥満誓の作品　232　志貴皇子と湯原王　234

一二　万葉第四期の世界……二三七
第三期から第四期へ　237　都を中心とする歌壇の動き　238　越中国と第四期

242　歌壇再び平城京に　243

一三　「山柿の門」と大伴家持・同池主……二四五

越中歌壇の両雄　245　山柿は誰か　250　山柿論の第三説　257

一四　大伴家持の歌風……二六二

最初の歌作り　262　家持の歌境変化　264　越中国赴任と家持の歌境　266　長歌への情熱　270　大伴家持の自然を見る目　275　大伴家持の傑作三首　277

一五　大伴家持をめぐる女流歌人……二八〇

第四期の相聞歌　280　大伴坂上大嬢の場合　281　笠女郎　282　紀女郎の歌　287

山口女王の場合　289　平群女郎の歌　290　その他の女流歌人　292

一六　第四期作者群像……二九五

田辺福麿とその歌集　295　狭野茅上娘子と中臣宅守の悲恋　302　霍公鳥の歌人久米広縄　306　辺境防備の防人たち　308

一七　東人は謡う―巻十四東歌の問題点……三一二

現巻十四の「東歌」　312　現「東歌」についての問題点　314　「東歌」の形態とその叙情性　315　「東歌」採集の仮設　320　「東歌」の唱謡法　321

一八　作者未詳歌の世界……三二六

作者未詳歌の分布状況　326　巻十三の古代歌謡　326　近畿圏の民謡巻十一・十二　329　地方民謡と乞食者の詠　335

あとがき……三四〇

引用万葉歌国歌大観番号初句索引……三四三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

万葉集・時代と作品

一　万葉集の時代とその区分

万葉集の時代と区分

万葉集の中で一番古い歌は第十六代仁徳天皇の御代のもので、最も新しい歌は、第四十七代淳仁天皇天平宝字三年（七五九）の大伴家持の歌で、巻二十の最後の歌（4516）である。

そこでその間を、天皇の御代で数えると、三十二代。年数にして、約四百五十年が、いわゆる万葉の時代ということになる。これは一つの歌集が内包する時代としては、かなり大きい数字であって、同じく万葉集だからといって、これをひとからげにして見たり考えたりすることは、不合理であることに気づかないはずがない。が、そこに最初に気づいたのは江戸時代に入ってからで、国学者賀茂真淵は、

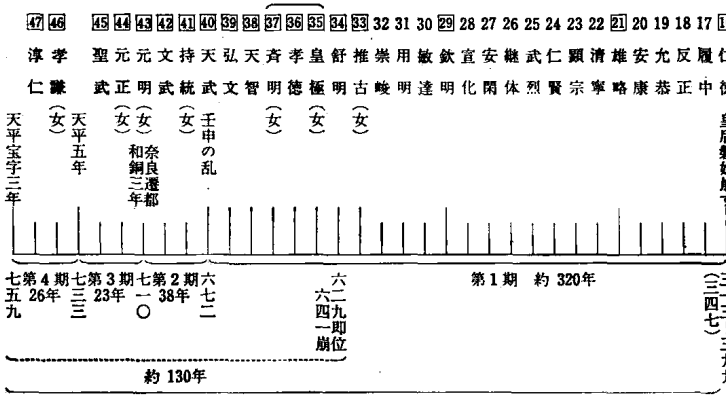
第一期（上古）いとしも上つ代々の哥は人の真ごころのかぎりにして、そのさま和（なご）くもかたくも強くも悲くも四の時なす立ちかへりつゝ前しりへ定めいひがたし。

第二期（舒明以後）高市崗本の宮の比よりをいはゞ、み冬つき春さり来て、雪氷のとけゆくがごとし。

第三期（藤原宮時代）藤原の宮となりては、大海の原にけしきある島どものうかべらむさまして、おもしろきいきほひぞ出きたる。

第四期（奈良朝初期）此いきほひ有るをまねびうつせしまゝに、おのがものともなくうらせばくなりぬ。

第五期（奈良朝中期）其宮のなかつ比には、ゆかしき隈もなき海山を、風はやき日に見んがごとあらびたるすがたと成りぬ。それゆ後の哥は此集にはのらず。（『万葉集大考』）



万葉集時代区分四期説

第一期　壬申の乱平定まで　六七二

第二期　奈良遷都まで　七一〇

第三期　天平五年まで　七三三

第四期　天平宝字三年まで　七五九

というように区分し、各時期について、極めて簡潔な説明を加えているのである。この真淵の時代区分が基礎になって、次々の学者によって、その区分が、明確になって行った。そして、現在最も普通に考えられる万葉集の時代区分は、沢瀉久孝博士・森本治吉博士編の『作者類別年代順万葉集』および沢瀉久孝博士の『万葉集序説』に見られる四区分説である。この説は、奈良朝以前と以後とに大別し、それをさらにそれぞれ二分するという考えに立っている。即ち、

第一期　壬申の乱平定まで（六七二）

第二期　奈良遷都まで　（七一〇）

第三期　天平五年まで　（七三三）

第四期　天平宝字三年まで（七五九）

という事になる。これを天皇の御代を主として図式化して示すと、上の図のようになる。

この区分図によってみると、第二期以下が約百三十年くらいであるのに、第一期が三百年以上になっている。それだけでなく、その三百年以上の第一期には、極めて

少数の歌を想定しうるだけである。

何故こういうことが起ったかという点については、拙著『万葉集の文学論的研究』の「初期万葉の世界」の中に稍〻詳しく説いたのでくりかえさないが、巻頭歌に雄略天皇御製と伝える、

1籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この丘に　菜摘ます児　家告らせ　名告らさね　そらみつ　大和の国は　押し靡べて　吾こそ居れ　敷き靡べて　吾こそ座せ　吾こそは　告らめ　家をも名をも

――かごも立派なかごを持ち、掘串も立派な掘串を持って、この丘で菜をつんでおいでの乙女よ。お前の家をお言いなさい、名をなのりなさい。この大和の国は、押しなべてわたしが君臨している、しきなべてわたしが君臨していらつしやる。朕は言うぞ。家も名も――

という歌を据えたこと、第二巻の巻頭歌として、さらにさかのぼった第十六代の仁徳天皇の皇后磐姫の歌と伝えられる、

85君が行け長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

――あなたの旅行は、日数が長くなりました。山を尋ねて迎えに行こうか、それとも待ち続けようか。どうしたらよかろう。――

86かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを

――こんなにばかり恋ひ慕っていないで高い山の磐を枕として、死のうものを。――

87ありつつも君をば待たむうち靡くわが黒髪に霜の置くまでに

――そのまゝにしていて、あなたのお帰りを待ちましょう。なよ〳〵となびく私の黒髪に霜が降りたように白髪になるまでも。――

88秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつ辺の方にわが恋やまむ

——秋の田の稲の穂の上にはかすんだように朝の霞がたつ。しかしその朝霞はいつかは片すみの方に消えて行くが、私の夫を恋うる恋のはれやらぬ思は何時、かたすみの方へ消えて行くのだろうか。それは望めそうもない。——

という歌を据えたことによる。

巻一・巻二は、既に半世紀も以前に、品田太吉氏によって、勅撰説がうち出されていて極めて整った編集がされているのである。(『心の花』一七・一〇大正二・一〇) そのこととこうした巻一・巻二の巻頭歌を選定したこととは、決して無関係でなかろうと考えるのが私見である。即ち少なくとも、万葉集の巻一と巻二の編集の意図は、私的な好みによって歌集を編もうというような、いわば趣味的な動機でなく、国家的な立場があったと思う。

われわれは、奈良朝に入ってから、古事記や日本書紀、風土記などが、編述されていることを知っているが、それと「万葉集」などという名のつけ方とを併せ考えると、万葉集の編さんも、それら歴史書・風土記などと同様に、やまとうたを集成しようという公の意志によって始められたと考えねばならないと思われる。

そのために、古事記や日本書紀に既に拾いあげられた歌(これを一般に「記紀歌謡」といっている)とは重複しないように配慮されたとみる。従って仁徳天皇の御代からはじまった万葉集第一期は三百年以上もの長期間であるに拘らず、その収録した歌が極めて少ないという結果になったのである。だから、万葉集第一期は、歴史的には、極めて重要な時期であるけれども、万葉集自体は、まだ深いねむりの中にねむっていると言う事が出来る。多彩な日本の上代史に対してほとんど、関心を示していないという状況だからである。

万葉のあけぼの

万葉集のあけぼのは、図式で示したように、第三十四代舒明天皇の御代からである。天皇は敏達天皇の皇子押坂彦人大兄皇子の御子であって、推古女帝崩御(六二八)のあと、聖徳太子の御子山背大兄王を押えて、蘇我蝦夷が推戴した天皇である。巻一の2番歌は、この天皇の国見の御製と伝える。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com